

# 学生の汎用的能力向上を目的とした 大学と地域を繋ぐアクティブラーニング・ゼミプロジェクト —「ヒューマンライブラリー」実施の振り返り—

山下 美樹

## 1. はじめに

高まる大学改革への期待に伴い、受動的学修から能動的学修への転換が叫ばれている昨今、アクティブラーニングが注目を浴びている。アクティブラーニングとは「学習者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」(2012年8月中央教育審議会答申)ものである。つまり、Vygotsky理論(1978)を基盤とした、教師は学習者の支援者として足場づくり(scaffolding)を行い、学生が能動的に学び合うといったプロセスを重視するものである。グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッション、その他プロジェクトを達成するために必要な実践を通して、個の自立と共創社会の実現、持続性可能な社会構築を見据えての取り組みである。

本章では、はじめに、麗澤大学における2015年度のアクティブラーニング、ゼミプロジェクト「ヒューマンライブラリー：生きている図書館」の実施目的と内容、次に、実施計画とその流れ、実施当日の様子と実施後の振り返り、収集データ、最後に、今後の研究方法と理論的枠組みについてまとめる。

## 2. ゼミプロジェクト、ヒューマンライブラリーの実施目的と内容

2015年山下ゼミプロジェクト「ヒューマンライブラリー：生きている図書館」(以下、HLとする)は、ゼミ生の能動的学びと、それに伴う汎用的能力促進を目的として実施した。汎用的能力とは大まかに次の3つを指す、(1)知識を活用する力：知的好奇心、本質を理解する力、理論的に考える力、(2)人に対する力：多様性を理解する力、チームワーク力、対話力、感情移入する力、発信力、(3)自分と課題に向き合う力：行動力、自己を受け止める力、自己反省する力、自信を生み出す力(麗澤大学の汎用的能力、2014)。ゼミは4年生11名と、3年生6名の計17名で構成されているが、3年生の6名(男子2名、女子4名)が中心

となり進めた。

HLのイベントをゼミのアクティブラーニングプロジェクトとして選んだもう一つの理由は、大学と地域を繋ぐ社会的活動を実施するためであり、実際、地域の参加者にも「本」役として参加協力を得た。HLの目的は、「偏見の低減、文化的多様性に寛容な社会、異文化共生社会の実現」である。HLではさまざまな経験、特性や価値観を持つ人々に「本」になってもらい、参加者「読者」に貸出しを行うイベントである。「本」役の方々に一回につき30分間経験を語ってもらう。参加者「読者」役はその話に傾聴することで、当事者問題の理解、自分自身についての気づきを深めるものである。

HLは2000年にデンマークで発祥した対話型イベントである。国内では2008年東京大学先端科学技術研究センターチームによって初めて開催され、駒澤大学、明治大学、獨協大学をはじめ、さまざまな大学機関や地域のイベントとして継続的に開催されている。2011年9月の時点では、60ヶ国以上でヒューマンライブラリーのイベントが開催されている(駒沢大学社会科学部坪井ゼミ、2012)。HLのイベントには、3つの役がある。本、読者、司書である。

まず1つ目の「本」役には、偏見や差別を受けやすい障がい者、セクシャルマイノリティー、難病当事者などの社会的マイノリティーが選ばれる。個人の辛い経験を語ることは、デリケートな部分に触れることにもなるため、本人の参加意思を尊重し依頼する。「本」役の対象には、社会的マイノリティーのみならず、大学近隣に在住する外国人居住者、シングルマザー、戦争体験者などに人生体験を語ってもらうことも可能である。このような普段接触のない人々から直接話を聞くことで、地域の人々と繋がるきっかけとなる。また留学生や教職員に「本」役になってもらうこともできる。

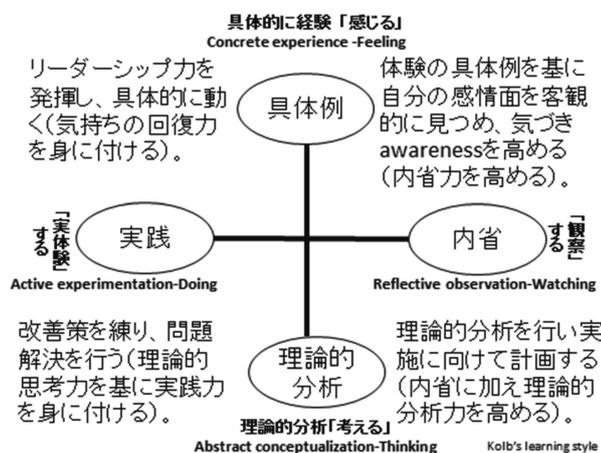
次に「読者」は、一般図書館と同じく「本」役(当事者)を借り、「本」対「読者」が1対1(1対数名まで可能)となり話を聴く。「本」役の辛い体験を聴き対話をする中で「本」役と「読者」間に、相互の自己開示も生まれる。それが「本」役が社会で受けて

いる偏見・差別の低減に役立つ。さらに、「本」役と「読者」役の間にセラピー効果も生まれ、人間関係の構築・社会への関心も生まれる。

3つ目の役「司書」役は、イベントの主催者であり、「本」と「読者」を対面させる役である。ゼミ生が「司書」役となり、「本」になってくれる方を集め、説明会を行い、イベントを実施した。さまざまな人や機関を通じて「本」役を探すのは困難であるが、彼らとの交渉、説明会、実施という一連の流れの中で「汎用的能力」が養成されることが期待できる。また「司書」役は「本」役の話の編集するため、聴く力、話をまとめる力など、学士力も身に付くことが期待できる。

### 3. ヒューマンライブラリープロジェクトの実施計画とその流れ

本プロジェクトでは、教員による一方的な体系化・汎用化された知識伝達型の学習やトレーニングと区別し、「経験→省察→概念化→実践」というサイクルを重視し、Kolb (1976) の「経験学習モデル」理論を意識して進めた。Kolb は「具体例」「内省的観察」「理論的分析」「実践」の4つのラーニングスタイルを提唱している。個人によってラーニングスタイルの傾向は異なるが、この4つのスタイルをサイクル的に体験していくことで、学びがより定着する。



本プロジェクトの準備段階から実施、終了までの一連のプロセスの中で、常に振り返りシートの記入、会議録の作成、レポート作成など、内省的観察を行った。具体的な活動内容は次のとおりである。

#### (1) 具体例：具体例から学ぶ

2015年4月11日(土)川口市民パートナーシップで行われたHLのイベントに、ゼミ生4名(他2名は都合により欠席)と共に参加し運営方法を観察した。実際に生きている「本」を貸り、その「本」役(当事者)から話を聴き、会場の様子やHLの運営方法を観察し、「具体的」にヒューマンライブラリーとは何

かを「経験」した。

#### (2) 内省的観察：経験を内省する

2015年の前期、4月の第一週目から15週間、HLの実施に向けての準備プロセス、イベント当日、そして実施後の感想や気づき、問題点について、各自振り返りノートをつけ続けた。まずは、2015年4月11日(土)のHLイベントに参加し「何を感じたか」、社会的弱者の立場、社会への問題意識、自分の立ち位置、自分に何ができるか、など、クリティカルシンキングや振り返りの練習を行った。また、駒沢大学社会学科坪井ゼミ(2012)『ココロのバリアを溶かす—ヒューマンライブラリー事始め』を講読し、HLの概要やその効果について各ゼミ生が分担してプレゼンテーションを行った。この作業を通して、自分たちなりのHLを実施するための心の準備を固めていった。

#### (3) 理論的分析(抽象的概念化)：自分たちのHLを企画する

川口市でのHLとは実施場所、状況、テーマも違うため、ゼミ生たちは自分たちのHL実施に向けて、自主的にゼミ以外の時間にミーティングを開き検討を行った。ミーティングの報告書は、担当者が自主的に作成し、当日中に報告をしてきた。「本」役には、地域在住・在勤から3名、また、ゼミ生が大学から2名(学部生1名と留学生1名)、そして他県より2名を探し出し出演を依頼し、計7名が参加してくれることとなった。

司書であるゼミ生たちは、それぞれが担当する「本」役の方々と個別にミーティングを開き、その都度、HLの目的についてのプレゼンテーションを行い、自らが担当する「本」役と30分間の語りのシナリオ作成のための相談を行った。自分たちなりのHLを創り上げるために、「大学と地域を繋ぐ」というテーマに沿って、HLイベント内容の作成、SNS (facebook) による広報、大学近隣団地でのチラシ配り(1000枚以上)、必要な資料作成を行った。

#### (4) 実践：HLイベントの実施

2015年7月12日(日)に麗澤大学HLを実施した。当日は司書であるゼミ生が中心となり、会場の準備から、「本」役とのオリエンテーション、受付、イベント実施、そして、HLイベント終了後に反省会を行った。参加者は7名の「本」役に加え、大学近隣、大学から延べ43名の「読者」が訪れた。ゼミ生たちはHLイベントの実施後、後期のイベントに向けての改善策を話し合った。また、各自が担当した「本」役の方の語りを聴き、レポートを作成した。これを基に後期には、多文化社会の偏見・差別問題などの文献購読を読み進め、さらに学術的な論文に繋げていく予定である。

#### 4. 実施当日の様子と実施後の振り返り

2015年7月12日(日)、麗澤大学生涯教育プラザにてHLを実施。下の麗澤大学ヒューマンライブラリースケジュール表の通り7名の「本」役の協力を得た。「読者」は延べ43名であった。表の7番目の「本」役の方は、ゼミ生たちが立ち上げたSNS (facebook)を見て、自主的に参加してくれた。

当日の運営スタッフは、3年生のゼミ生6名が「司書」として中心となり活動した。また、ボランティアとして4年生のゼミ生1名、地域連携センターから大学職員2名の協力を得た。したがって運営側のスタッフは著者も含め10名であった。当日の仕事は、会場設営、受付、タイムキーピング、昼食準備、読者の誘導、オリエンテーション、などである。場所は一つの大フロアに、テーブルの島をつくる形ではなく、一人の「本」役が一教室を使用できるように設定した。

今回初めてのHL実施だったため、受付作業が滞ることも多少あった。例えば、HLのちらしを見てきた「読者」でも、HLの要領を充分理解していないこともあり、そのような「読者」への説明をする担当が必要な場面もあった。また、当日の「読者」数が少なかつたため、一人も借り手のないコマがあった。そこで、表の3番、7番のHLベテラン経験者の方々の提案で、急きょ2名の「本」役(表の2番と3番の方)をタイ

アップし対談を実施した。即決で行ったが、チーム全体の協力で成功した。昼食会は、「本」役と「司書」の懇親会として行った。HL終了後に、30分間ほどの振り返りミーティングを「本」役と「司書」、ボランティアスタッフ、そして著者を含め10名で行った。

今回のHLイベント実施後の「読者」のアンケートには「30分間があつという間だった。また参加したい」、「普段、お会いできないような方々の率直な言葉を聴けてとてもよかった」、「これからどんなことがあっても乗り越える勇気をいただいた」といった感想があった。そして、終了後のミーティングで「本」役の方々からは、「学生さんたちと触れ合うことができ良い機会だった。もっと対話したかった」、「初回は緊張したが、2回目以降は言いたいことが言えるようになった。とても楽しかった」とのコメントがあった。また、「司書」として今回のイベントを担当したゼミ生たちからは、全員が「楽しかった、いろいろな方々にお会いできて楽しかった」といった意見があった。その他、本の方々とやり取りをする段階では、「次回は、司書が本の方を知るだけではなく、自分のことを本の方にもっと知っていただき、パートナーとして親密度を高めていきたい」と振り返った。

#### 4-1 ゼミ生のコメントに見られる汎用的能力の向上 「司書」として従事したゼミ生たちには、汎用的能

表：麗澤大学ヒューマンライブラリースケジュール

	「本」役の方々の紹介	11:00～ 11:30	11:45～ 12:15	12:15～ 13:00	13:00～ 13:30	13:45～ 14:15
1.	歌にギターに英会話、パン作りも本格派のマルチに活動する粋な男性	A	A	昼食 「本」役 「司書」 役の 懇親会		
2.	全身リュウマチで3ヶ月の寝たきりを経験し、人生が大転換した育児ママ	B	B		B	B
3.	生まれつきの眼瞼下垂症であり、患者会NPO立ち上げスタッフ	C	C		C	C
4.	体が男性でも心は女性。日舞の師範としても活躍する和風居酒屋の経営者				D	D
5.	癌と闘いながらもアイドルとして活躍し人生を全うした姉について語る妹	E	E		E	E
6.	韓国での兵役を通して成長した経験を語る留学生	F	F		F	F
7.	外見からは判断できない、健常者の姿をした障害者	G	G		A	A

※A, B, C, D, E, F, Gは教室番号。

力の向上が見られた。HL 実施後のレポートには、次のような内容が記されていた。次の内容は、それらを麗澤大学の汎用的能力別にまとめたものである。

- (1) 知識を活用する力：知的な好奇心、本質を理解する力、理論的に考える力
  - HL は読者側のみならず、当事者側両方の偏見に対する心のバリアを解放する。
  - HL は人種差別、高齢者問題、いじめなど、さまざまな問題の本質を知り解決の第一歩によるコミュニケーションの場だ。HL の良さを地域、日本各地、世界にまで発信できたらいいと思う。
  - 障がい者=かわいそうな人というイメージで一括りにしてしまわないためにも HL は役立つ。
  - 相手を知るためには、ネット上ではなく直接話すことが大切である。相手の表情から相手が何を考えているのか知ることが大切だ。それができるのが HL だと思う。
- (2) 人に対する力：多様性を理解する力、チームワーク力、対話力、感情移入する力、発信力
  - HL プロジェクトをとおして、チームワーク、積極性、目上に対するマナーを学ぶことができた。
  - HL プロジェクトをとおして、メールのやり取りで正しい敬語の使い方を復習することができた。
  - 相手への気配りをしつつ、人のサポートに回ることでリーダーシップを発揮する方法を学んだ。
- (3) 自分と課題に向き合う力：行動力、自己を受け止める力、自己反省する力、自信を生み出す力
  - 「本」役の方の自分自身のことを語る勇気を見て、自分もたくさんの人々と交流したいと思った。
  - 先天性の障害を持つ「本」役の方が、「自分を好きになることが大事」であることを教えてくれたおかげで、自分のことをもっと知り、好きになろうという考え方ができるようになった。
  - 自分のことを、少なくとも HL を実施する前よりは理解することができるようになったと感じた。また、皆と活動しているうちに自分に自信が出てきて、意見も言えるようになった。
  - さまざまな価値観や人生観を学び、チャンスをつかめる人間になりたいと思うようになった。HL の活動をしなければ、こんな考え方には絶対にならなかったと思う。

以上のコメントから、彼らの中に汎用的能力の向上が見られる。ゼミ生たちは能動的な活動として、Facebook の立ち上げと更新、ポスター作り、ロゴ作成、チラシ配り（近隣に 1000 枚以上配布）、ゼミ以外での自主的なミーティング、ゼミミーティングの記録などを自主的に行ってきた。特に、ゼミミーティングの記録を担当してきた学生は、ミーティングのあった日には、必ずその日のうちに議事録を作成し、メール

で報告をしてきた。この学生は、彼女が一年次の項に、著者が担当した別の授業を受講した時には見られなかった積極性とリーダーシップを、本ゼミプロジェクトでは発揮した。

## 5. 収集データ

以上の HL 実施後のレポート以外に、次のデータを収集してきた。(1) 学生個人個人の振り返りの記録（毎週のゼミで回収）、(2) 参与観察（準備から実施までの様子）、(3) LINE、メールを使つての教員、並びにゼミ生間のやりとり、(4) 自分自身の振り返りノート、(5) ゼミ生の自己評価とチームメイトの評価、(6) HL 実施後レポート、以上 6 点である。研究倫理ガイドラインに基づき、研究参加者である、ゼミ生全員から、また「本」役の 7 名からも同じくインフォームドコンセントを得た。

## 6. 今後の研究方法と理論的枠組み

本プロジェクトの目的は、ゼミ生の能動的学びとそれに伴う汎用的能力の促進であり、研究者として常にそれを意識しながら研究参加者（ゼミ生 6 名：男子 2 名、女子 4 名）と関わってきている。そこで、今回の HL イベント実施から得た経験、つまり成果物について「知る」作業を進めていく上で、箕浦（2015）の文献を参考に、研究のメタアプローチとしては、解釈的アプローチを採用する。個人の汎用能力を客観的に一般化して数値で「測る」のではなく、教員と学生間、学生間、そして、HL イベント関係者と学生間の中での気づきや学びを振り返り、行動や状況に埋め込まれた意味に着目し、「わかる」ことに焦点を当てる。研究者としてのゼミ生（研究参加者）の能動的活動を主観的に参与観察していく。

理論的枠組みについては、ゼミ生の汎用的能力の向上について、今回収集したデータを基に彼らの行動や状況に埋め込まれた意味を解釈していく上で、成人教育理論・変形教育理論（Baxter Magolda, 1982； Brookfield, 1993； Kegan, 1994, 1982； Knowles, 1984； Perry, 1968）を基に、さまざまな切り口で研究していくことが可能である。研究の切り口として、1 つ目には、学生の汎用的能力の向上とその効果的アプローチとは。2 つ目には、学生の汎用的能力を向上させるための教員と学生間の関係性に着目し、メンター・メンティーの関係性とその在り方。例えば、距離の取り方、コミュニケーションの取り方。3 つ目には、HL の目的とする「社会的マイノリティーへの偏見の低減」について、司書である学生のものの見方がどのように変容していったか。4 つ目には、大学と地域を結

ぶためのHLイベントの有効性について、などである。

## 7. おわりに

地域を巻き込んだHLプロジェクトをとおして、確実に学生の汎用的能力の向上が見られている。座学やクラス内に留まるアクティビティーでは得られない、感動や葛藤、緊張感などの感情を、地域の人々に関わる中で体験することが、知識・感情・スキルの3つを向上させる原動力となると言える。このアクティブラーニングを通して、ゼミ生たちは能動的に学び、明らかに彼らの認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験知の向上が認められた。また、今回のHLのテーマは「大学と地域を繋ぐ」であったが、少なくとも司書であるゼミ生たちと、地域の生きている「本」として参加してくれた人々との交流は今でも続いている。そして、「読者」として参加してくれた大学近隣の人々には、今後も継続的に大学の一ステイクホルダーとして、地域と学生たちの交流をとおして学生を知ってもらうことは重要である。

ゼミを担当する教員（学びの支援者）として、ゼミ生のHLプロジェクトの足場づくりを今後も継続していきたい。そのためにも、今回のHLを実施したゼミ生たちをメンターとして、次期のゼミ生たちを指導する、ピアメンターシステムの構築が重要である。つまり、教員・学生間のメンター・メンティーの関係性のみならず、ゼミ内の先輩・後輩のメンター・メンティーの関係性を構築する必要がある。それにより、ゼミ内の関係性が強化され、協力・共創の文化が構築されることが期待できる。

以上の振り返りから、HLプロジェクトは、学生の個の自立と、共創社会の実現に寄与することができると言える。また、大学の使命である、「学生をよき市民に育て、社会に送り出す」ことができる効果的なプロジェクトの一つであると言える。

## 参考文献

- Baxter Magolda, M. F. (1992). *Knowing and reasoning in college: Gender-related patterns in students' intellectual development*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Brooks, J., & Brooks, M. (1993). *The case for the constructivist classrooms*. Alexandria, VA: ASCD.
- Kegan, R. (1982). *The evolving self: Problem and process in human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kegan, R. (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Knowles, M. S. (1984) *Andragogy in action: Applying modern principles of adult education*, San Francisco: Jossey Bass.
- Kolb, D. A. (1971). Learning and problem solving. In D. A. Kolb, I. Rubin, & J. McIntyre (Eds.), *Organizational Psychology: An Experiential approach* (pp. 27-42). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Perry, W. (1968). *Forms of intellectual and ethical development in the college years*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: Development of higher psychological processes*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 駒沢大学社会科学部坪井ゼミ (2012)『ココロのバリアを溶かす—ヒューマンライブラリー事始め』人間の科学社
- 箕浦康子 (2015)「データとは何か?」『異文化コミュニケーション論集』13, 21-33
- 文部科学省 中央科学審議会 (2012年8月28日)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2014年8月20日閲覧)
- 麗澤大学の汎用的能力 (2014)「3つのチカラ/12の能力要素/24の構成要素の一覧表」麗澤大学